

一 小ぶりな建築が多かった

尾藤…よろしくお願ひします。まず全体的な総評や建築計画の視点から見てよかつた作品や印象に残つた作品などについてお伺ひしたいです。

藤岡…全体的な印象として、全部レベルは高かつたかなとは思ふんですけど、小ぶりな建築が多かつたかな。平屋の低層、中層ぐらゐの建築が多くて、もう少し限られた土地でユニタビダシオンみたいな都市的な建築提案は少なかつたですね。どれも失敗はしてないけど、あまり大きな成功もしてない。厳しめにいうとそんな印象でした。大きな失敗はしてない。そういう意味ではみんなちゃんと戦略的に考えていったなと思ひました。建築の意匠だけじゃなくて、世の中の仕組みをどう変えていくかとか、ちゃんと関心が向いていてと思つたので、それはいいことだなあと思ひました。でも卒業設計としてみると、そこまで到達できていたのは少なかつたなという印象ですね。レベルは高かつたから余計期待しちゃうつていうところだと思ふんですけど。

大原…今の話と関連して、平面的な計画ばかりだつたかなというかんじで、立体的というか上に積み重なつた複雑さが表現されるようなものはなかつたような気がします。地形なんかはみんなすごく意識していて地形の面白さはあるんだけども、それに従つて断面も考えていたとは思ひますが、基本的には全てがある程度一枚で、平面で表現されちゃうような空間のつながりみたいなものがほとんどだつたような気がした。小ぶりつていうことの意味は、実際の周辺の容積率いっぱいに建てている今の建築のルールからだいたい外れていたということだよねたぶん。郊外、市街化区域外、都市計画区域外もあるけど、周辺の容積に合わせるつてことはあまりしてない感じがあつて、結果それが縦積みの複雑な空間構成が生まれてなかつた原因かなというかんじがしましたね。フロアがたくさん積み重なつていくと、それだけ難しくなつて、つながり方が複雑になるはずですよ。空間のつ

二 フィールドでの現実の難しさ

奥野…審査会の人にプログラムに対する提案が横国はあまりないという話をされていたと思うのですが、地域の問題を解決している案が多い割にはプログラムに対して結局は既存のものを入れちゃつてている感じがしていて。それに対してどうアプローチしているかみたいな悩んではいたんですけど、結局最後まで解決まで至らなかつたと思ふんですよ。

藤岡…そういうのは建築計画研究室に来ると勉強できると思ひます。（笑）

大原…現場やフィールドでとにかくいろんなことを感じて、そこから問題意識固めていくのが大事だと思ひます。でもなかなか難しいのは建築で解決できる方法がごくわずかだという現実をフィールドに入れば入るほど感じてしまふんだよね。だから仕組みを変えて、その中で建築が連動して変わつていくんだけど、建築だけを変えることによつて変わつていくつていう難しさ、その効果みたいなものにはいつもフィールドで忸怩たる思ひがあります。

だからたぶんフィールドに入つて現場のいるんな地域の課題とかをあぶり出していくと、そこから建築に結びつく提案がなかなか見えてこなくなる可能性はある。そういうことと言うと毎年のことなんだけど、建築計画の調査とかをして、そういう事の積み上げで卒業設計になつていく例はほとんどないだよね。その辺難しいなつていう感じはするけど。一通り都市を読むことはできるけど、そこから本当の生活なんかがどう対応していくべきかというビジョンを考える時に、建築を変えれば生活が変わるつていう簡単なことではないし、また、必要に応じて建築は変わつていかないといけないんだけど、どう変わるべきかはなかなか難しいなということを感じちゃう。丘の上の住宅地の計画を

ながりは、二次元と三次元では二倍 ज्यादा くて三乗できいてくるから八倍ぐらゐになる。つながり方のバリエーションも増えていくので、それだけ縦動線を考えるつていうのは難しいことだけど、そういうところの難しさは割と避けて通られていたかなつていうかんじはありましたかね。だから建築計画的に印象に残つたものかもしれないのはそういうことなのかな。機能が平面的に並べてあるつていうかね、ジグソーパズルのように並べてあるつていうのはあつたかもしれないんだけど、それがどう関係性を持つか二次元でしか描かれてなかつたから、その辺が難しいパズル解いてるなつていう印象があんまりなかつた感じ。ただ未来はそういう時代じゃないのかもしいないけどね。幅広いつていうか、実際人口減少で都市の今のこの密度つていうのはほとんど解消されていくはずだから、先を見ている提案なのかなつていうかんじもするんだけど。

藤岡…何年前か前までは建築すること自体に罪悪感をもつムードがあつた時期もあつて。なかなか派手な建築にどうしても疑問を持つちゃうみたいな。でも今年には建築そのものは肯定的にみんな捉えていて、既成の市街地に介入するのも、変えちゃいけないんじゃないかつていう罪悪感はいい意味であんまりなくて。ちゃんと介入していかないと変わつていかないという姿勢は共通していたと思ひます。この時代に生まれ育つて建築を学んできた世代ならではの感覚なのかなと思ひました。それはいい悪いじゃなくて、そういうものなんだなと思ひながら受け止めていました。

ただやつぱり建築計画の立場からすると、小ぶりな建築になるとどうしても時間軸と

しては日常（平時）と親和性が強くなつてきて、その密度がやっぱり弱いから、なんか平屋がばらばらと置かれるだけで、あんまり生活のリァリティが伝わつてこないつていうところは、全体について共通していたと思ひますね。小ぶりになるのは全然悪くないんだけど提案の密度をあげないと。だから時間軸上の提案の密度とか使われ方とか住まわれ方とかそういう時間変容のあり方とかそういうところがもう少し興味関心持てたら良かったかなと思ひます。

付け加えたり取り外したりとか新しく仮設のものが生まれたりとかそういう小さくなることの良さつてあると思ふんだけど、小さくなるだけという提案もあつて、ちよつと惜しいなという感じはしましたね。卒業設計という性格上ある程度床を増やさないとけないという意識で、どこかで無理が生じているというのは聞いている側もよくわかることなんでしょう。

大原…あんまりそういう意味では僕は突出してこの人というかんじはなかつた気がするんですよ。割とみんな出来も良かったし。多分対外的にどこかで展示されたり取り上げられて他の学校に見せる、他の大学の人たちが見る時に、国大はこんな感じだつていうのを見せる効果の高い人を吉原賞には良いと考えていて。みんなそれぞれいろいろ問題意識を持つて取り組んでいるというのは分かつていたのでいいのかなつていう感じはありました。だから吉原賞に関しては、あんまり差がなかつた感じがします。

藤岡…例年になくばらついたと思う。

大原…だから出来の良さと表現のしやすさというか、伝わりやすさつていうところが賞を取つたと思ふんだけど。どれだけ悩んだかとか、どれだけ苦労して計画に結びつけていたかつて言うのと、割とみんな頑張つてやつていたんじゃないかなと思ひます。



藤岡泰寛

1997 京都大学 工学部卒業

1999 京都大学 工学研究科 環境地球工学専攻 修士課程修了

2011- 横浜国立大学大学院 都市イノベーション研究員

准教授



大原一興

1981 横浜国立大学 工学部建築学科卒業

1983 横浜国立大学 工学研究科 建築学専攻 修士課程修了

1987 東京大学 工学系研究科 建築学 博士課程 単位取得満期退学

2011- 横浜国立大学 都市イノベーション研究員教授

